

演題 6

睡眠時無呼吸症候群におけるエプワース睡眠尺度(ESS)の有用性について

高比良 直也¹⁾、阪田 麻美¹⁾、村上 愛¹⁾、有本 雅美¹⁾、松村 佳永子¹⁾、小谷 敦志¹⁾、
久保 修一¹⁾
近畿大学医学部奈良病院¹⁾

【背景・目的】

睡眠時無呼吸症候群(以下:SAS)の診断には、無呼吸低呼吸指数(以下:AHI)を用いており、補助的な指標として酸素飽和度低下指数(以下:ODI)を利用する。これらの指標は、良好な相関を示すことが知られているが、値の乖離から、相関性が変化する場合もある。今回、これらの相関性がエプワース睡眠尺度(以下:ESS)の値によってどのように変化し、その変化からESSがSAS診断において有用性があるか検討した。

【対象】

平成26年11月～平成29年1月において、当院で簡易的終夜睡眠ポリグラフィ検査を行った280名中、記録条件が良好であった151名(治療中の経過観察であるものは除く)を母集団とした。

【方法】

母集団全体151例およびESS 5以下の集団(以下:ESS正常低値群)45例、ESS 6～10の集団(以下:ESS正常高値群)63例、ESS 11以上の集団(以下:ESS病的高値群)43例の3群に分類し、それぞれAHIとODIの相関図から近似曲線および相関係数(r)を算出した。

【結果】

ESSで分類した3群間のAHIおよびODIに有意差を認めなかった。母集団におけるAHIとODIの相関は $y=0.814x-5.10, r=0.872$ と良好な正の相関を示した。ESS正常低値群、ESS正常高値群におけるそれぞれの相関では $y=0.659x-2.12, r=0.794$ 、 $y=0.704x-3.22, r=0.793$ であった。ESS病的高値群における相関では $y=0.941x-6.12, r=0.952$ であった。

【考察】

ESSは主観的な指標であり、実際の診療では問診などで用いられる程度である。また、ESSはAHIとODIのそれぞれと相関を示さない事も指摘されている。今回の検討でも、AHIとESSおよびODIとESSで相関性はなく、3群におけるAHIおよびODIの値に有意差を認めなかった。しかし、ESS病的高値群におけるAHIとODIの相関が母集団全体および各群において最も良好であったことから、ESSの値によってAHIとODIの相関性は変化し、さらに、SAS診断の補助的な指標であるODIの値から、確定診断の項目であるAHIの値を、より正確な数値で推定することが可能であると考えられた。ESSは、SAS以外でも一過性の疲労感やナルコレプシーといった過剰な傾眠を示

す病態においても高値を示すため、軽視されることが多い。しかし、本検討においてESSが異常高値の場合には、気流センサー装着不良等でAHIが正確に測定できない場合や、睡眠中のSpO₂変動のみを検査した場合でもODIの値からAHIの値をより正確な数値として、臨床に報告できる可能性が示唆された。

【結語】

ESSの値によりAHIとODIの相関性に差が見られ、またESSが異常高値の場合において、ODIの値からAHIの値をより正確な数値で推定することが可能であると考えられる。

近畿大学医学部奈良病院 0743-77-0880 内線番号 3076